

海と  
生きる

# 海洋リテラシー for 気仙沼 (暫定版)

令和4年1月

気仙沼市海洋教育推進委員会  
気仙沼市教育委員会

## 「海と生きる」気仙沼の人びとのために

気仙沼で育つ子どもたち、気仙沼で生きる人びと、そして気仙沼の未来をつくる人びと。気仙沼の様々な人々の根底には、昔も今も変わらず「海と生きる」という揺るぎないアイデンティティがあります。このアイデンティティは、自覚的に意識する・しないに関わらず、年齢、立場、職業、性別などの様々な違いを超えて、気仙沼の一人一人の中に存在しています。

2011年の東日本大震災を経て、気仙沼の人々は「海と生きる」というキャッチフレーズを復旧・復興のために掲げました。この短いキャッチフレーズは、これまでずっと気仙沼の人々の中にあつた共通のアイデンティティを言葉にしたものです。そこには気仙沼の豊かな未来を描き、持続可能なまちづくりと人づくりに向かおうという決意が込められています。私たちは、どのように「海と生きる」ことができるのでしょうか。この問いに対する答えはいくつもあるはずですが、海洋リテラシーfor気仙沼は、これらの問いへの一つの応答であるとともに、これからも問いを考えるための足がかりとなるものです。

## 海洋リテラシー for 気仙沼 とは？

なぜ「海と生きる」なのかを考え、海と生きる未来を描きながら、自らの人生を通じて実践していく人を、気仙沼では海洋リテラシーを身に付けた人と呼びます。

気仙沼市の公立幼稚園・小学校・中学校・高等学校は、これまで海洋教育の様々な実践に取り組んできました。海洋リテラシーfor気仙沼は、それらの実践をもとに、今後の実践で目指す子ども像と、その根底にある人間像・社会像を確認していくことで成立しました。海洋リテラシーfor気仙沼は、地域と強く結びついています。そのためこの海洋リテラシーは学校教育だけではなく、気仙沼の全ての人々に関わります。

気仙沼の人びとは、消費者・労働者・市民など、生活の中でいくつもの顔を持ちます。幼い子どもが大人へ成長するなど、生涯を通じた変化もあります。そのため、どの大原則や小項目と深く関わるかは、その都度の立場や状況によって異なります。たとえば大原則Aは、気仙沼で育っている子どもや、その親、保育・教育関係者により深く関わります。一方で、大原則BやDは、消費する立場にあるときや働く労働者であるときに、より意識されるはずですが、さらに、子どもにとっては地域の海が一番身近ですが、地域の海から地球全体の海へと視野を広げるにつれ、小項目の意味することも変わっていきます。

またこの海洋リテラシーは生活と密に関わっているため、知識内容・技能だけでなく、人の情感・態度と行動・活動も含んでいます。6つの大原則と26の小項目は、気仙沼の人びとが皆でそれぞれに「海と生きる」という生き方を目指すための、基本的な理解・感性・行動を示しています。たとえば大原則Eの小項目dは「参加する」で終わっていますが、実際に地域の活動に加わることで参加する人もいれば、地域の活動を知り、それについて友人との話題にすることで参加する人もいるかもしれません。大原則と小項目が意味することは、人によって変わります。

## 子どもたちを「海と生きる」へと導く

教育に目を向けましょう。気仙沼で学ぶことは、地域と海との関わりを学ぶことでもあります。2011年の東日本大震災を経て、大人の生活は一変しましたが、子どもの学びも大きく変わりました。その変化を踏まえながら、どのように子どもたちを「海と生きる」へといざない、導いていくのか、幼稚園と学校は試行錯誤してきました。

幼稚園と学校は、気仙沼で生きる子どもを「海と生きる」へと招待する役を担っています。それは、地域・人々・子どもたちとともに未来の気仙沼を積極的につくっていくことでもあります。幼稚園と学校は、海と生きる郷土に向き合うこと、主体的に考え行動すること、多様な人々と協働することの大切さを子どもに伝えています。気仙沼に根差しながら協働し行動することが、未来の社会を人間性が生かされる持続可能な社会にするために必要だからです。

そのためには大原則Cにあるような科学的な海の理解とともに、大原則BやDのような社会・経済的な視点や、大原則Eのような文化・歴史的な視点も大切です。こうした様々な分野と視点によって、海と人・海とまち・海と地球といったいくつものつながりを知り、評価し、過去・現在・未来を通じて考えることが可能になります。幼稚園と学校が「海と生きる」へと子どもをいざない、導く際、海洋リテラシーfor気仙沼は道標の一つになります。

## 未来に向かうための海洋リテラシー

最後に、未来に目を向けます。「海と生きる」ためには、様々な知識や技能を理解し身につけるに加えて、実践的な力が必要となります。批判的・創造的な思考力、行動力、多様性を受容すること、そして他者とのコミュニケーション力や協働性が求められます。一人一人が「海と生きる」を実現する方法や場面は様々ですから、こうした力はその度ごとに異なるバランスや内実で求められ、表現されます。

気仙沼という土地、歴史、文化はすべて海とつながっています。そして気仙沼での暮らしは海を介して世界とつながっています。そこで重要なのは、持続可能な生活とまちづくりです。一人一人の未来、気仙沼の未来、そして世界の人々と地球の未来を考えながら、人はどのように生き、どのようなまちづくりをする必要があるのでしょうか。人と土地、そして海を取り巻く状況が日々変わり、新しい知識・技術が登場することで、これからも海洋リテラシーfor気仙沼は議論され、修正される必要があります。そうした議論と修正を経て、「海と生きる」のアイデンティティとそこに込められた決意は、未来へと引き継がれていくでしょう。

## 海洋リテラシー for 気仙沼 6つの大原則と26の小項目

### A 海と出会い、なかよくなる

- a 地域の暮らしに密接なかかわりを持つ気仙沼の海に触れ、実際に海を体験する。
- b 暮らしと探究の基礎となる海との情緒的なつながりを持つ。

### B 海の恵みを知る

- a 海が生命を育てていることを知り、海を含む環境と生命との直接的・間接的なつながりを知る。
- b 海が育む生命を知り、多様な生命のつながりを知る。
- c 海が育む生命は、「食」を通じて、わたしたちの生命・健康を育み維持する大切な役割を担っていることを知る。
- d 海が育む生命は、消費・経済活動を支えていることを理解する。

**C 海の仕組みを知る**

- a 地域が利用し、住み続けてきた土地の地理的特徴に対し、海がもたらした影響を理解する。
- b 地域の海とつながる広い外洋の海流の仕組みや特徴を理解する。
- c 海水の温度に目を向け、変わりゆく海水の状況を地球全体の熱の蓄積とのかかわりから考える。
- d 海水に溶け込むものに目を向け、変わりゆく海水の性質とそれがもたらす影響を理解する。
- e 海洋に生じる様々な問題的現象を、自然科学的視点を踏まえて調査しその原因を理解する。
- f 気象災害に対する海洋の変化の影響を理解する。
- g 海が自分や社会に与える影響、そして自分や社会が海に与える影響を理解する。

**D 海をいかす**

- a 地域が食し、利用している海の資源を知る。
- b 海の資源と環境をいかし、守るために、倫理的な生産・消費活動を実践する。
- c 地域の漁業や養殖業のあり方を知り、その歴史や文化、技術を尊重する。
- d 地域の海との暮らしが、海と直接的に関わらない多様な仕事によって直接的・間接的に支えられていることを理解する。
- e 海をいかす産業を通じて、気仙沼は、他地域や他国のの人々と、支え合っていることを知る。

**E 海と生きる文化を重ね、伝える**

- a 地域が海との暮らしの中で受け継いできた文化に触れ、その多様性と有意味性を知る。
- b 海が地域にもたらした災害と復興の歴史を知る。
- c 地域の人々が災害に対応するために形成した文化や知恵を知り、実践する。
- d 被災の歴史と記憶を受け継ぐ地域の活動を知り、参加する。

**F 海と生きるまちをつくる**

- a 地域は固定的なものでなく、人の出入りにより日々新たに更新されていることを理解する。
- b 市民と自治体による地域のまちづくりの計画を知り、参加する方法を理解する。
- c 地域の課題とその背景を知り、向き合う。
- d 地域の暮らしが、海を介して世界の人々の生活や、地球の現状と結び付いていることを理解し、向き合う。

## インフォメーション

- ・より詳しい情報は、気仙沼市のWebサイトで確認いただけます。（URL）
- ・関連する学校教育での取り組みは、気仙沼市教育委員会のWebサイトをご参照ください。（URL）

## 「海洋リテラシーfor気仙沼」をつくる

- ・このガイドは、2021年度気仙沼市海洋教育推進委員会を通じて作成されました。そこには、気仙沼市で海洋教育に取り組んできた学校の教員と教育委員会の人びと、それを支援してきた東京大学の海洋教育センターのスタッフが含まれています。
- ・「海洋リテラシーfor気仙沼」は、より多くの人びとの声と視点を取り入れながら、これからも発展していきます。